

2014 年度 障害学生支援室 フィードバック結果について

はじめに

2014 年度、サポートスタッフによるサポートを受けた障害学生は 7 名（聴覚 3 名、視覚 3 名、肢体 1 名）おり、85 名の学生がサポートスタッフとして登録。そのうち、実際にサポート活動を行った学生（前期 39 名、後期 33 名）を対象に、サポート活動を振り返るためのフィードバックを提出してもらった。フィードバックより得られた回答をもとに分析した結果、以下のことが分かった。

結果の概要

【サポートスタッフ】

- ・ ほとんどのサポートスタッフ¹が障害学生支援室の活動で「良かったことや意識が変わったことがあった」と回答
- ・ 学生コーディネーターからのフォローは適切だった」とする回答が後期は前期に比べ25ポイント増。またチームミーティングも「非常に役立った」とする回答が29ポイント増。
- ・ 後期のフィードバックでは、サポート活動が半年以上経ち経験値も上がったことから、支援技術についての不安は減。一方、障害学生やサポートスタッフ同士でもっとコミュニケーションをとっていきたいとする回答が目立った。

【学生コーディネーター】

- ・ できるだけサポートスタッフや障害学生とコミュニケーションをとるようにし、後輩サポートスタッフに学生コーディネーターの役割を知ってもらうよう努めた。
- ・ とくに連絡調整の方法に課題を感じた。支援室と学生コーディネーターの役割分担の点でもっと改善できることがある。

【障害学生】

- ・ サポート内容について、サポートスタッフから改善策を提案してもらったことで、より分かりやすくなった。
- ・ サポートスタッフと打ち解けることに時間がかかった。サポートスタッフとの十分なコミュニケーションが大事。
- ・ 課題としては、新規サポートスタッフを集めること、また急なキャンセルやサポートスタッフと連絡がつかない場合など、連絡調整のルールをもう少し整えるべき。

¹ 前期は 96%、後期は 100%のサポートスタッフがこのように回答した

まとめ

2014 年度は約 7 割が新人のサポートスタッフであったことから、前期は障害学生もサポートスタッフも支援技術やコミュニケーションの面で様々な不安を感じていたが、後期になると技術面の不安が徐々に解消されていることが分かった。しかし課題として残ったのが、障害学生やサポートスタッフ同士のコミュニケーションである。もっとコミュニケーションをとりたいとする意見が多く、今後、学生ルームや講座、交流会などのイベント企画、LINE などを活用した、サポート活動やメーリングリストに留まらない学生同士のコミュニケーションの活性化が望まれる。

また前期と比べ後期は学生コーディネーターの存在感の高まりが感じられる結果となった。これは前期の学生コーディネーターがモデルとなったことで、後期に様々な工夫が可能であったことがうかがえる。しかし学生コーディネーターからのフィードバックでは、支援室との連絡調整の点で課題が指摘されるなど、今後もさらなる改善が目指される。

教員に関しては前期とほとんど変わらず、依然協力を得られない教員も一定程度いることが分かった。今年度も引続き、障害学生支援室の学生と共に F D / S D 研修の実施を目指していきたい。